

p 33 「一問一答」

1. 多くの解熱鎮痛成分は、プロスタグランジンの産生を抑えることで熱を下げ、痛みを和らげ、炎症を鎮める。
2. アスピリンやイブプロフェン等を含む解熱鎮痛薬は、胃痛や腹痛等の痙攣性の内臓痛にも効果がある。
3. アスピリン喘息は、アスピリン特有の副作用ではなく、他の解熱鎮痛成分でも生じる可能性がある。
4. イソプロピルアンチピリンは、一般用医薬品で唯一のピリン系解熱鎮痛成分である。
5. ピリン疹は、アスピリンで起こる薬疹である。
6. プロスタグランジンの作用が促進されると、胃腸障害を起こしやすくなる。
7. エテンザミドは、15 歳未満の小児に対しては、いかなる場合も一般用医薬品として使用してはならない。
8. イブプロフェンは、末梢における抗炎症作用は期待できない。
9. アセトアミノフェンは、主として中枢作用によって解熱・鎮痛をもたらすため、末梢における抗炎症作用は期待できない。
10. アスピリンは、一般用医薬品においては、15 歳未満の小児に対しては、いかなる場合も使用してはならない。
11. イブプロフェンは、出産予定日 12 週以内の妊婦が服用できる。

【解答】

1. ○
2. × 痙攣性の内臓痛には効果がない（ただし、月経そのものが起こる過程にプロスタグランジンが関与しているため、月経痛には効果がある）。
3. ○
4. ○ アスピリン、サザピリンは、ピリン系ではないことに注意。
5. × アスピリンではなく、イソプロピルアンチピリン（ピリン系）で起こる。
6. × プロスタグランジンの作用が妨げられると、胃腸障害を起こしやすくなる。
7. × エテンザミドは、水痘（水疱瘡）又はインフルエンザにかかっている 15 歳未満の小児に対しては使用を避ける必要がある。
8. × 末梢における抗炎症作用が期待できないのはアセトアミノフェン。イブプロフェンは抗炎症作用を有する。
9. ○
10. ○
11. × イブプロフェンは、出産予定日 12 週以内の妊婦は服用しない。